今まで自分が助けてもらったように、
これからは困っている農家の力になりたいです。

農業に懸ける情熱

1 就農したきっかけ

両親が農業を営んでいたため、幼いころから農作業を手伝っていました。大人になってからも農繁期には手伝いを続けていましたが、「農作業は辛い」というイメージが強く、継ぐつもりはありませんでした。そのため、高校卒業後は九州の建設会社に就職し、日本各地を飛び回りながらダム建設の現場で働いていました。

しかし、23歳の時に母が体調を崩したことをきっかけに、一度地元へ戻ることになりました。体調を崩した母と段々と年を重ねてきた父の姿を目の当たりにし、長男として農業を継ぐ決意を固めました。

もともと農業に携わるつもりはありませんでしたが、幼いころから常に農業に触れて育ってきたこともあり、大きな抵抗を感じることなく就農することができました。

2 就農当時のこと

手伝いの経験があったとはいえ、就農した当初はわからないことばかりでした。毎日が手探りの連続でしたが、そんな私を支えてくれたのが、地域の農家のみなさんやJA職員、青年部の仲間たちでした。多くの人が親身になって教えてくれたおかげで、困難を乗り越えることができました。

これからは、自分が助けてもらったように、同じ地域で困っている農家がいれば積極的に声をかけ、誰かの力になれる存在になりたいと思っています。

3 仕事をするうえで大切にしていること

農業は天候に大きく左右されるため、晴れた日は作業が滞らないよう畑仕事をできるだけ早く終わらせ、雨の日には倉庫で機械の整備や調整を行うよう心掛けています。また、土の状態を把握することは非常に重要なので、土壌診断を行い、適切な施肥に努めています。近年は物価高騰の影響で、これまで以上に経費がかかるようになったこともあり、作業方法を見直すなどの対策も講じています。

そうした日々の取り組みが実を結び、作物が健康に育ち、無事に収穫できた時には大きな達成感を感じます。

4 青年部活動について

ランナーを務めた情熱直送便

地元の先輩から誘ってもらったことをきっかけに、就農と同時に青年部へ加入しました。青年部に加入したことで、普段は接点のない人たちとの交流が広がり、さまざまな情報を共有できるようになったことは大きな助けになりました。また、気軽に相談できる仲間ができたことで、精神的にも大きな支えとなりました。

2年前からは本部役員として運営に携わり、より広い地域の盟友と関わる機会が増え、とても貴重な経験を積むことができました。現在は監事として活動しています。情熱直送便をはじめ、農産物のPRや地域の子どもたちへの食育活動などに積極的に取り組み、食の大切さや農業の魅力・大変さをより多くの人に伝えられるよう、青年部活動に力を入れていきたいです。

人物 memo

岩見沢市西川町
保科　和将 さん（35歳）

妻の桃子さん、父の春美さん、母の登美子さんの家族4人で約20haの農地に水稲や小麦、大豆を栽培。高校卒業後は九州の建設会社に就職し、ダム建設の現場で勤務。母親が体調を崩したことをきっかけに地元に戻り、23歳で農業の道へ進みました。

現在は青年部の監事を務め、充実した生活を送っています。